(2)2.26 事件

2.26 事件とは、1936 年 2 月 26 日に、皇道派青年将校二二名が、下士官・兵士合わせて 1400 名を率いて起こしたクーデタ事件である。青年将校たちは、統制派軍人や対米協調路線を採る政治家や朝日新聞社を襲った。事件によって、斎藤実（さいとうまこと）内大臣、高橋是清（たかはしこれきよ）大蔵大臣、渡辺錠太郎（わたなべじょうたろう）陸軍教育総監を射殺、鈴木貫太郎（すずきかんたろう）侍従長に重傷を負わせた。そして陸軍省、首相官邸、国会議事堂を占拠し、陸軍首脳陣に国家改造を要請した。

皇道派の指導者である真崎甚三郎（まさきじんざぶろう）や荒木貞夫（あらきさだお）は、当初、クーデタを支持し、荒木陸軍大臣の告示もクーデタを容認するものであった。ところが、海軍も財界もクーデタに反対を表明し、昭和天皇の「占拠部隊」の撤収命令が下ると、事態は一変する。クーデタに対する位置づけも「決起」から「占拠」へ、「占拠」から「騒擾」へ、「騒擾」から「反乱」へとまたたく間に変化していった。統制派の力が強い陸軍首脳部はクーデタ部隊を「反乱部隊」として鎮圧する方針を明らかにした。その結果、反乱を起こしたクーデタ部隊は「国賊」とされ、一挙に瓦解してゆく。一方「2.26 事件」を鎮圧した統制派が、政治の中枢に食い入ってゆくという結果をもたらした。